

松任谷 正隆の

僕のひとりごと

26

VOL.26 楽屋は民家

ちょっと前から、この連載も時代を遡ってちょうど70年あたりになっているが、そのついでに当時の強烈な印象の思い出話を書こうと思う。

当時の日本の音楽界はメインストリームの歌謡曲と、アングラなフォーク軍団、それにどことなく過激なロック軍団に分かれていたように思う。

圧倒的に力を持っていたのはナベプロ、ホリプロをはじめとするテレビ界を仕切っていた歌謡曲軍団で、それに比べればフォークもロックもはみ出し者達に過ぎなかった。

とはいえ、はみ出し者達に共鳴する酔狂な若者達がいたのも事実で、そういう連中の目はたいていがアメリカに向いていたように思う。

そして、アメリカでは伝説の「ウッドストック野外コンサート」が行われたのもこの頃だった。

熱狂するアメリカの若者達の映像が流される度に、日本でも・・・と考える若者達が現われたのも不思議ではない。

ある日、例の僕の所属していたバンドに日本のウッドストックに出演しないか、という話があった。

前回は話したが、僕は当時やっていたバンドにあまり興味を持てずにいたし、どうでもいいや、くらいに思っていた。

でも、話によると島ひとつを貸し切りにする、とか何十万人集まる、とか、これは日本の伝説になる、とか俄には信じがたい噂が流れ始めた。

で、僕はいいや福岡行きの最終便の飛行機に乗ったのである。

なぜ最終便かといえば、そのコンサートはオールナイトで、

僕たちの出番は夜中の2時と言われていたからだ。

福岡の港から専用の船で渡るから、と言われ、

真っ暗闇の港らしきところに辿り着き、

待つこと1時間。ようやくやって来たのは、

ボートに毛が生えた程度の小さな釣り船で、

もうこの時点で嫌な予感はしていたのだった。



30 分ほど、長閑な釣り船に揺られ、島に着くと待っていたのは、家畜運搬用の小さなトラック。

楽器と人間と一緒に荷台に乗せられ、鼻をつまみながら島の山頂を目指す。この山に何万人ものお客がいるとは到底思えないのだが、まあ、来てしまったものは仕方ない。山頂が近づくと音が聞こえ始める。派手な音だ。

ロックの連中だろう。ちょっとだけ胸が高鳴った。けれど、高鳴りもつかの間。

辿り着いた山には超しょぼいステージと 300 人程度の観客。

山はスカスカ、楽屋になっている小さな家は 20 だか 30 だかのバンドで溢れかえっている。

バンドの人数の方が客より多く見えた。逆だろう。

しかも、小さな家のリビングにあたるであろう部屋には煌々と電気がついており、当時お決まりだった酒盛りが始まっている。30 人、いや 40 人はいただろうか。部屋の隅では飲み過ぎて吐いているやつもいる。

ここに 2 時までいるのか、と思うと気が遠くなった。

他の部屋はどうか、と見ると、6 畳間くらいの畳敷きの部屋が 2 つ。

それぞれ酔いつぶれた連中が 10 人くらいぎゅうぎゅうになって寝ている。臭い。

ようやく僕が見つけたのはその奥にある 4 畳半くらいの部屋。

ここには 6-7 人くらいが横たわっており 30 センチくらいの

僕の横になれるスペースがあった。

で、とにかく寝なくては、とその間にモゾモゾと割り込んだ。

ああ、地獄だ、と思いながら目をつぶると、なんだか足のあたりに嫌な気配が。

ふと見ると巨大蜘蛛が足の上を歩いているではないか。

これが声を出さずにいられるか、という話である。

もちろん、その部屋からは速攻で追い出され、仕方なく、

ヤブ蚊に刺されまくりながら外で横になった。

もしこの話の続きが聞きたかったら次回に続けるけれど、

さらに酷い事態がこのあと待っているのである。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4 歳からクラシックピアノを習い始め、14 歳の頃にバンド活動を始める。

20 歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンド SKYE を結成。

2021 年 10 月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。